「文化財保存活用地域計画」総合調査から⑤

― 四浦半島浦々に残るえびす様とその信仰 ―

○問い合わせ
津久見市教育委員会　生涯学習課　地域計画担当
TEL 0972-82-9528 ／ FAX 0972-85-0081

荒代トンネルを抜けると正面に四浦の海が広がります。豊後水道に面し、瀬戸内海へと続くこの四浦半島一帯は、リアス海岸が造り出す独特な景観と自然の美しさ、そしてそうした自然に育まれてきた歴史や文化、さらに伝統的な行事が色濃く残っています。

今月は、新春に因み、四浦半島の浦々に残るえびす様について紹介します。えびす様といえば、「宝船」に乗る「七福神」の一柱として、根強い人気をもつことで知られ、狩衣、指貫袴や風折烏帽子をつけ、右手に釣竿、そして左手には釣り上げた鯛をかかえ、嬉しそうにほほ笑むおなじみの姿が目に浮かびます。大黒天とともに財福をもたらす神様として、室町時代の末ごろから全国的に民衆に受け入れられていった信仰で、現世利益、除災招福を期待したものとされています。

江戸時代、「佐伯の殿様浦でもつ」といわれ、佐伯藩では盛んに漁業を奨励しました。そうしたことから、佐伯藩領下に所属していた四浦半島一帯でも漁業が盛んで、藩にとっても重要な地域でした。荒代から間元さらに高浜に至る各浦々では、神社の一角や岩陰に祠を構え、えびす様を祀ってきました。いずれも海に向かって、また海が一望できる場所で、豊漁祈願、漁業に携わる人たちを見守るかのように祀られています。

釣竿を持ち、釣り上げた鯛を抱え、ほほ笑むその顔と姿は、「釣りして網せず」という言葉のとおり、無駄な殺生はしない、暴利をむさぼらない清い心を象徴しているとされ、商売繁盛の神様として人気を集めたともいわれ、そこが、この一帯、漁場（りょうば）ならではの素朴な信仰として伝えられてきたのかもしれません。

現在、残っている浦々のえびす像は、江戸時代の終わりごろに作られたものがほとんどで、代々補修や補彩、時に作り替えながらも大切に祀られてきたものです。

毎年１月１０日の「初えびす」「十日えびす」には、四浦半島一帯でも、えびす様に一年の豊漁と漁業に携わる人たちの安全祈願のための神事が行われ、地域の伝統行事となっています。

写真は、津久見市観光協会から発行された『つくみ四浦（ようら）半島　えべすのお宝マップ』です。このマップには、今ではすっかり有名になった河津桜とともに、「深良津の蛭子様」（市指定有形文化財）をはじめとするこの一帯の代表的なえびす様を紹介しています。

津久見では、２月に入ると、四浦半島は淡いピンクの花をつける河津桜で彩られ、多くの人たちを楽しませてくれます。またキラキラと光る春の海を見るえびす様の笑顔もひときわ輝いているように見えます。

豊漁と漁業従事者の安全祈願祭
（深良津漁港）

『つくみ四浦半島 えべすのお宝マップ』
（津久見市観光協会）

「文化財保存活用地域計画」総合調査から⑥　― 高浜のとんど ―

今年も、１月１４日の日曜日、高浜地区の伝統行事「とんど」が行われました。

「とんど（焼き）」とは、年神様（一年の福徳をもって年始にくる神様で「歳徳神（としとくじん）」ともいう）への感謝と一年の無病息災を祈る伝統的な火祭り行事です。

今年も一週間前から準備をすすめてきた「小とんど」と「大とんど」が立派に出来あがりました。一年の福を司る歳徳神がおられる方向恵方（えほう）、今年は「東北東やや東」です。

今から７３年前の高浜の聞き取り調査をまとめた「四浦高浜採訪記」（昭和２６年、臼杵高等学校民俗研究部）には、「七日正月には六日の年の夜にしていた家の飾り物やお供物を下げる。そしてその下げた物や祭具を寄せて浜でとんどを作り、それを正月十四日の晩たき、その火で餅をあぶり、餅のうばい合いをする。その後に門松、松（家の中に立てる）、お供物等の灰を床の下に入れておくと虫が入らないと言われている。又、もえはしを床の下に入れてもよい。小とんどを焼いてしまって、その火を子供が大とんどにうつす時、大人が子供の邪魔をして移す事の出来ない様にする。打消す時間が来ても、移せない時は、故意に移させる。大とんどに早く移すと縁起が悪いと言う。とんどは丸い形で立て場所も定まっている。小正月（十五日）には、そのもえはしで小豆がゆを炊く。」と報告されています。

地区の掲示板の１月の行事予定表を見ると、６日に「トンドスダ用意」、１２日に「トンド建」、１４日「トンド焼き」とあり、今年も例年通りに準備が進められてきたことがわかります。

こうした伝統行事を通して、高浜地区の人たちは、自然と神様に感謝し、生きることを喜び、地域のまとまりを築いてきたのかも知れません。

一年の無病息災を
祈る人たち